



Title	歴史記述と喩法に関する一考察
Author(s)	鈴木, 純一
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 27, 87-98
Issue Date	2018-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71724
Type	departmental bulletin paper
File Information	087-098_suzuki.pdf



歴史記述と喩法に関する 一考察

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 教授
鈴木 純一

鈴木
純一
SUZUKI Junichi

abstract

Historical science and metaphor

SUZUKI Junichi

The purpose of this paper is to consider the relation between historical science and tropics in the 19th century from a viewpoint of Observation concept in sociology. The analysis target in detail is "Meta-history" (1973) by Hayden White. In the Book he insisted that description of history was prescribed by rhetoric, concretely four tropics — metaphor, metonymy, synecdoche and irony. This research inspects the validity of this proposition. In the case, relations with sociological system theory are also considered. Key words are observation level, tropics, social systems, and history consciousness.

0 はじめに

ヘイドン・ホワイトの『メタヒストリー』の邦訳が昨年2017年出版された。長らく待たれていたものだが、翻訳者が「日本語版解説」で述べているように、原文の英語は「かなり意味の取りにくい独自の文体」（ヘイドン・ホワイト：『メタヒストリー』、岩崎稔監訳、作品社、2017年、675頁。以下、MHと略し、カッコ内にページ数を挙げる形で、この邦訳書からの引用を示す。）を持っており、「難物」であるという。原著は1973年に出版され、極めて大きな反響を呼んだにもかかわらず、40数年を経てからの邦訳の出版となった。ちなみに独語訳も35年後の2008年であり、しかも、邦訳者の言葉を借りれば「厄介な部分」は「省略」（MH676）されているということだ。

難解であることの理由として、翻訳者が挙げているのは、「何かに憑かれたようにあわただしく議論を進めていく論証や説明の過程に多くの飛躍が含まれていること」であるが、それにもかかわらず「歴史記述に関して考えようとする者を刺激してやまない強烈な喚起力を備えているテキスト」（MH676）でもあるという。本考察の筆者は、「歴史記述」を中心テーマに研究をおこなっているわけではないが、喩法およびメディアの観点からテキスト解釈の問題を考えてきた。そのような筆者にも、ホワイトの『メタヒストリー』には「強烈な喚起力」の片鱗が感じとれる。

この考察では、上述のような性格を持つ『メタヒストリー』の理論的フレームを、メタファー論の観点から眺めながらスケッチすると同時に、社会学的な二次観察（メタ観察）理論との接合およびその際の問題点を覚書風にまとめておくことを目的とする。筆者が考える、この書物が潜在的に有するメディア論としての展開可能性について、いずれ本格的に論じたいと望んでいるが、本考察にはその予備作業となれど願っている。

1 「詩学」という視点と歴史意識

『メタヒストリー』は、19世紀以降のヨーロッパの「歴史意識の歴史」の変遷を中心テーマとしている。19世紀ヨーロッパにおいて独立した、そして特別な価値を持っていた歴史研究は、20世に入ると多様な観点から疑念にさらされることとなった。それには、例えば、ヴァレリー、ハイデガー、レヴィ＝ストロース、フーコー等のヨーロッパの先端知識人による歴史観の修正が関与している。具体的には、「西洋人が19世紀の初頭以来誇りとしてきた歴史意識というものが、そもそも自分たちのイデオロギー的な立場を支えるために要請された都合のいい理論上の足場に過ぎなかったのではないか」

(MH50)という疑念が広がり始めたということである。19世紀の歴史学は、「思いあがった自画像」を作り、西洋人特有の歴史意識の「先入観」から優越意識を持つようになったのではないか、という疑いは現代にもつながっている。いわば「世界（＝他者）の発見」とともに自文化が相対化される途上で典型的にみられる現象であるといえるかもしれないが、「歴史学」という知の枠組み自体に対する批判的な意識が伴っていたことは注目に値する。

しかしホワイトは、19世紀の西洋歴史学よってつくられた自画像の内容に関する問いには直接的に答えない。少なくとも『メタヒストリー』では、あえて回避する。というのも、彼の言い方を借用すれば、「本書における私の方法は、内容そのものを評価するものではなく、ひたすら形式的構造だけを吟味するフォルマリストのそれである。」(MH52) その際の形式「フォルム」としてホワイトが想定しているのが「詩学poetics」であり、具体的には「喩法」、さらに詳しく見れば修辞学における「隠喩（メタファー）」、「換喩（メトニミー）」、「提喩（シネクドキ）」、「反語（アイロニー）」の4つの表現技法が主たるフレームとなっている。

付け加えておけば、歴史学に限らず、フランスの構造主義やそれ以降の批判的理論家たちの知的営為も、ホワイトにしてみれば、このような喩法の宝庫であり、その分析によって解釈戦略一般の解明が可能と考えているようだ。しかし、彼ら自身には、そのことが明確に自覚されていない。ホワイトに言わせれば、フーコーですら、「かれが人間科学の歴史を分析するために用いるカテゴリーが、喩法の定式化そのものであることが分かっていない」(MH53) となる。いずれにせよ、歴史を「言語的構築物」と捉え、形式的な言語構造として喩法から眺めることによって、「研究対象となる時代における歴史的想像力の深層構造のなかにある基本的な差異が描けるはず」(MH54) であるというのが『メタヒストリー』という書物の理論上の基本的発想である。

2 歴史的叙述における5つの水準

「歴史の説明」は、必然的に、時代とともにその複雑性を増してゆく。すなわち、「歴史的」とされる原資料が加工され、解釈される割合が高くなることによって、その叙述の意味の偏向や選択性が顕著になっていく。「原因と結果」あるいは「始まりと終わり」の組み合わせや異なる出来事の単位化、接続可能性の複雑化、社会理論的言えば「複雑性の増大」といえるだろうか。その「歴史」説明の進化の段階を、ホワイトは、5つの水準に分けている。以下それぞれについて簡潔に見ておきたい。

①クロニクル（年代記）とストーリー（物語）

この二つは、歴史的な説明の「原初的な位相」を示しており、「加工されていない歴史的な記録から史資料を選択して配列する過程」(MH51) とされ

る。ストーリーは「発端」「中間」「結末」が現れることで、それと識別される。

②プロット化の様式

前段階で現れたストーリーの種類を特定化し、性格的な意味を与えることをホワイトはプロット化と呼び、分類の対象としている。これもまた4つに分けられる。

最初は「ロマンス」である。典型的なのは、キリスト教伝説にみられる、悪に対する善の勝利の物語である。これは人間の自己確認のプロセスでもあるとされる。

続いて「喜劇」と「悲劇」が挙げられている。ホワイトの説明によれば両者とも、「墮落によって原罪を負うという運命的な条件から人間が少なくとも部分的に解放されうることを表す」(MH60)ののだが、結末において異なり、前者の基本が和解の期待と希望だとすれば、後者は分裂状態の認識である。

4つ目の「風刺」は、そのような「救いなど、存在しない」と主張するドラマだと説明される。「ロマンス」の対極に位置し、根底には、「人間は究極的には世界の支配者であるどころか、むしろその虜なのだ」という理解があるという。

以上の分類を代表する19世紀の歴史家を、ホワイトは以下のように挙げている。ロマンスはミシュレ、喜劇はランケ、悲劇がトクヴィル、そして風刺劇の様式を用いたのはブルクハルトとされる。このような対応関係の割り切りが可能かどうかは、とりあえずいまは問わない。ここで注目したいのは、強調されているのは、歴史の「説明」において、このようなプロット、すなわち叙述形式が、その内実のイメージを規定しているという点である。(MH60) 付言しておけば、ホワイトのこのようなプロットの分類は、フライの『批評の解剖』に基づいている。

③論証の様式

さらに概念化の抽象レベルが一つ上がると「形式的論証」へと移行する。これは「歴史家が最終的に「全体の意味」ないし「その目的」等を説明しようとするための前提となるような」概念レベルである。(MH63) ここでホワイトが依拠しているのは、ペッパーが『世界仮説』の中で挙げている、歴史的説明のために採用できる四つの形式的範例である。順に並べておけば、「個性記述論的説明」、「有機体論的説明」、「機械論的説明」、「コンテキスト主義的説明」となる。

④イデオロギー的意味の様式

ホワイトはこの4番目の水準の説明を「倫理的要素」と関連付けている。なぜ「倫理的」なのか。それは、歴史家が歴史的出来事から何らかの意味を引き出す時に、避けようのないある特殊な立場、引き受けている基準が、この水準において現れるからである。「イデオロギー」とは、「社会的実践という現在の世界のなかで一定の立場をとり、また（中略）それに働きかけるように命じる社会的規則や命令規範の束」を意味する。(MH80) ホワイトはこ

の分類に関してもやはり先人の成果に依拠している。カール・マンハイムである。彼が『イデオロギーとユートピア』（邦訳は、2006年刊、高橋徹・徳永恂訳、中公クラシックス版を挙げておく）でおこなった分析に従い、ホワイトは「アナーキズム」、「保守主義」、「ラディカリズム」、「リベラリズム」の4段階を提示する。

上述の4つの立場は、観点を取り換えつつ検討されるが、ここでは、「さしあたって正当に望むことができる最善の社会形態」すなわち「ユートピア」との関係でどのように説明されているかを確認しておく。「保守主義」者にとって、それが「現時点で事実として支配的である制度的な構造の漸次的な向上」に見ようとするのに対し、「リベラリスト」のユートピアはその構造が改善されると予想される未来に位置している。その遠い未来の理想的構造を性急に、つまり、「いま・ここ」に革命的に実現しようとするのが「ラディカリスト」の立場だとすれば、そのユートピアをむしろ遠い過去にみるのが「アナーキスト」ということになる。(MH85)

3 説明効果の3つの水準と4つの様式の親和性

説明効果に関する、クロニクルとストーリーを除く3様式（プロット、論証、イデオロギー）それぞれに見られる4形態は、親和性に基づいて選択的に結びつく傾向がある、とホワイトは説明する。その組み合わせにかんして、ホワイトは以下のような表を作り、説明を加えている。(MH92)

プロット化の様式	論証の様式	イデオロギー的意味の様式
ロマンティック	個性記述的	アナーキスト
悲劇的	機械論的	急進派（ラディカル）
喜劇的	有機体論的	保守的
風刺劇的	コンテキスト主義的	自由主義

それぞれ横の組み合わせが、親和的・同調的な選択となるが、しかし、それだけしかありえない必然的なものではない。むしろ親和的・同調的でない組み合わせのせめぎあいや格闘が、優れた歴史的記述（歴史家）では往々にして起こるという。(MH91) ホワイトが挙げている具体的な例を見てみよう。例えばミシュレの歴史記述の主導的組み合わせは、〈ロマンティック＋個性記述的＋自由主義〉となる。それに対して、ブルクハルトは〈風刺劇的＋コンテキスト主義的＋保守的〉な記述を用いる。ヘーゲルは複雑で、ミクロでは〈悲劇的＋有機体論的〉、マクロでは〈喜劇的＋有機体論的〉となり、これを人はラディカルとも、保守的とも解釈することがあるという。

このようなせめぎあいと格闘を、ホワイトは「弁証法的緊張」とも表現し、整合性や一貫性を求める言語そのものの本性でもあるとする。そして、その中心的な形式を体現するのが「詩学」という理屈だ。このような説明から、歴史家が歴史の場、歴史の対象を構成する場合、形象化に「詩学」が必然的

に大きく関与していることとなる。「歴史家が歴史の場で直面している事態は、文法学者が新しい言語を前にしたときと同じ具合」(MH93)なのだとされる。ここではとりあえず、対象を生み出す主体となっているのが歴史家や文法学者という、客観的観察者と目される人々であることに注目しておきたい。というのもこの客観性の問題は、後で対象観察におけるメタレベルの問題と繋がっていくからだ。しかし、さらに重要なのは、以下の記述である。

このような概念に先立っている言語論的基本要素は、そもそも先行形象的な性格を、つまりあらかじめある形象として分節化されて浮かび上がってくるという性格を持っているために、それが配列されている支配的な喩法様式に基づいて特徴づけることが可能になるのである。(MH93)

ここで詩的言語の4つの基本的な喩法すべてが登場する。というのも、「喩法の理論は、私たちに、進化の一定の時期における歴史的想像力の深層構造の形式を分類する基盤を与えてくれる」(MH94)という主導的なテーゼの導入と説明がここでおこなわれるからだ。

4 形象化の詩学—4つの喩法

歴史的な対象の形象化の際に深層において働いている詩学とはなにか。それは、前述したように、形象の創出を支えている言語に本来備わっている4つの喩法、すなわち「隠喩、換喩、提喩、反語」のことである。それぞれの特性を、ホワイトの説明に沿って確認しておきたい。

①隠喩（メタファー）

ホワイトは4つの喩法すべてを包含する喩法の全体概念としても「隠喩」という表現を使っているが、その機能的な役割に関しては、それぞれ別の性格があるという。最初に取り上げられる「隠喩」の機能的な意味の中心は、「代理表象」にあるとされる。ホワイトが例として挙げているのは、愛する人を「薔薇」に喩えるものであるが、これは「二つの客体には明らかな差異があるにもかかわらず、類似点が存在するという主張」(MH96)であり、例に沿えば、「美、はかなさ、繊細さなどの性質」とされる。「薔薇」というメタファーが果たすこのような代理機能を、ホワイトは「形象」あるいは「シンボル」とも言い換え、このような隠喩による異なるものの同一視を「共有する性質の暗示」と捉えている。

現代のレトリック論から見て特徴的なのは、喩えるものと喩えられるものが共有する性質があらかじめ与えられてしまっている点である。このようなホワイトの隠喩理解では、メタファーの創造的・発見的な機能を説明できず、批判の余地もあろうが、それについてはここでは踏み込まない。確認したい

のは、共有する任意の性質や性格により、ある表現が異なる対象に使われ、形象化されるという機能である。これをホワイトは喩法の出発点と見做し、隠喩の核とした。

②換喩（メトニミー）

上述のように類似性あるいは共通の性格からシンボルとして形象化される隠喩に対し、全体（喩えられるもの）がある部分（喩えるもの）に還元される喩法をホワイトは換喩の中心的機能とした。挙げられている例は、「50隻の船」を「50柱の帆」と表現する場合である。この関係を「代理」と捉える可能性を否定することはないが、しかし、隠喩と決定的に異なるのはそれが「全体を部分に還元」することにあるという。この場合、比較は暗黙の裡に働いているが、性質や性格の共有は認められない。「代理」は、あくまでも部分が全体の代わりをする関係である。この還元をホワイトは、「同時に二つの現象を区別し、一方を他方の顕示したものという位置に還元する」（MH98）と説明している。

注目されるのは、換喩において、一方に還元される二つの現象が「行為主体」と「行為」（あるいは「原因と結果」）である場合、一つの喩法からその両者の概念的なカテゴリーが意識化されるという効果に言及している点だ。これに関しては、あとで二次観察におけるメタレベルとの関連で、再び触れる。

③提喩（シネクドキ）

換喩の、二つの対象の「部分と全体」という「外在的」な関係を内在化するのが、ホワイトによれば提喩ということになる。換喩と違い、提喩は二者の関係を原因と結果あるいは行為主体と行為という理解で捉えることはできない。代わりにホワイトが持ち出すのが、ミクロとマクロの関係、あるいは両者の「統合」という考え方である。この統合は、「部分の総和とは質的に異なり、しかも諸部分がそのミクロコスモスの複製にすぎないようなある全体のなかで解釈することが可能」（MH98）なのだと言われる。

ホワイトが例として挙げているのは、「かれは真心そのものである。」という表現である。この表現におけるマクロコスモス—ミクロコスモス関係にホワイトはまず注目し、さらには、次のような解釈を付け加える。すなわち、この例においては、「提喩は換喩に重ね書きされている。」（MH100）つまり、換喩としての特性と、提喩的な性格の二重の観点からこの表現の含意を解釈することができるということだ。前者の解釈では、心臓（真心）が彼という有機体の中心であるという還元的な読み方となる。後者の観点から解釈するならば、全体性（かれ）の要素（真心）のなかにある質的な関係性を示していることになる。このような二重性を「統合的」とホワイトは説明するのである。

最後の喩法である反語を説明する前に、ホワイトは隠喩、換喩、提喩の三つの喩法に関し、前述した歴史の形象化と説明様式との対応に関連させて、つぎのようなまとめかたをしている。すなわち、隠喩は「個性的記述論」と

いう様式に、換喩は「機械論的」な還元、提喩は統合機能を持つという点で「有機体論」の在り方と対応する。これは次のように言い換えられてもいる。「隠喩は経験的世界を対象-対象という観点で先行的に形象化する。換喩はそれを部分-部分の関係性として、提喩は客体-全体という関係性として可能にする。」(MH100) さらに続けて、この三つの喩法による表現を、「同一律の言語」、「外在性の言語」、「内在性の言語」とも呼んでいる。これら「素朴な」喩法に対して、複雑性のレベルが一段上がるのが、反語(アイロニー)である。

④反語(アイロニー)

まずは定義らしきものから確認しておこう。ホワイトによれば、「アイロニーとは、言葉の自己否定を意図してメタファーを意識的に用いること」とされる。上述の3つの喩法が、いわば「素朴な」(＝言語の形象化能力に限定される)ものであるのに対して、アイロニーに関しては、シラーを引きながら「情感的な(＝自己意識的、つまり自己反省的な)」という形容をしている。反語はその表現の直接的な意味を何らかの形で「不適切なもの」(MH102)と見做す契機、根本的な再考を促す契機とも説明される。

なぜか。反語は、肯定と否定の正反対の意味の振幅を持つ。「字義通り」から最も離れる可能性を有する喩法となる。隠喩、換喩、提喩いずれも意味の振幅は、原則的には、肯定と否定の反転にまで及ばない、意味の「ずれ」の範囲内で解釈可能であった。すなわち、その「ずれ」は、その表現が受け取られた時には「ずれ」であることが一般的に認識できる範囲にある。が、反語の場合には、それを「字義通り」の意味で解釈するか、あるいは反転させた意味で解釈するかは、表現の方法、文脈、状況等を総合的に考慮に入れつつ判断し、決定しなければならない。

このような反語のメカニズムを、ホワイトは、アイロニーはある意味で「メタ喩法」的な位相を持っていると説明する。「アイロニーは、形象的な言語が誤用可能だと自己意識に悟らせるというあり方で展開されているからである。」(MH102) 同様の観点から、「反省性の高い意識段階」、「経験的形象の否定」、「自己批判的」、「信念を無力化」等の特性を表す言葉が用いられることになる。すなわち、ホワイトによれば反語のレベルに至って初めて、喩法は自己対象化、それも自己否定的な契機を持つ自己観察が可能となると解釈しているわけである。この点に関しては、あとで再考する。確認しておきたいのは、この解釈を引き出す理由となっているのが、喩法と歴史的な意識レベルの発展との関連性だということである。すなわち上述の4つの喩法は歴史記述と同時に歴史解釈のプロセスと連動しているが、そのプロセスを一旦廃棄し、新たなレベルで新たな展開を始める契機となるのが「反語段階」であるとホワイトが特徴づけている点である。すなわち、隠喩、換喩、提喩それぞれに対応しながら段階的に進化する歴史意識と記述は、ある臨界点に達すると、反語によって一時的に解体されることになる。とホワイトは説明するのである。

5 喩法と歴史的叙述の様式との関係性

おそらく『メタヒストリー』という書物の理論的な要綱を、もっとも簡潔に表しているのは次のくだりである。

「喩法理論は、19世紀ヨーロッパに出現した歴史的な思考の支配的な様式がもつ特性を明確にする方法を提供してくれる。これは詩的言語についての一般理論の基礎を提示するから、四つの段階の最後がぐりと一巡して最初に再接合するという、閉じた循環的展開をなす歴史的想像力深層構造を明確にすることもできる。どの様式にもこの循環的展開の、つまり歴史的世界を隠喩的に理解することから始まって、換喩的な理解や提喩的な理解に進み、さらにあらゆる知をそれ以上還元できないような相対主義として捉えるアイロニー的な理解へと展開する言説の伝承プロセスのなかにおける、一段落や一契機として理解することができるのである。」(MH104)

つまり、この段階的プロセスにおいて、アイロニーはひとつの最終段階となり、それ以上還元できないようなところまで進んだ後に、「最初に再接合」する新たなレベルを準備する。19世紀におけるその「再接合」は、後期啓蒙段階（ヴォルテール、ギボン、ヒューム、ロバートソン）のアイロニー的観点から、その全否定的な方向性にやはり「反省」を武器に対抗する前ロマン派（ないし疾風怒濤運動）（ルソー、メーザー、バーク、ヘルダー）への移行に見られるという。

いずれにせよそれぞれの歴史家は、隠喩、換喩、提喩、反語を様々に投影させながら競合する独自の「リアリズム」を作り上げた。一つの喩法が一つの段階に厳密に一対一対応するほどの法則性があるわけではない。が、全体の構造的流れとしては緩やかな対応関係あるいは親和性があり、それが「弁証法的」競合を可能にしているという。

ここで4つの喩法の歴史的な発展形態を機能に沿ってまとめておくと、歴史対象を生み出す想像力としての隠喩、対象間の関係性を担保する換喩、それらの関係を序列化し秩序づける提喩、そしてその秩序の反省的な解体と再生としての反語とでもなるだろう。むしろ、ホワイトの「循環理論」に従えば、これは再び隠喩へと繋がっていく。

この喩法と歴史的構築力の循環の具体的な表れとして、ホワイトは19世紀歴史学における記述の分析をおこなっているが、その詳細と妥当性に関してはここでは踏み込まない。確認しておきたいのは、歴史の語り方（喩法）が、その内容を「メタ」レベルから規定しているという考え方をホワイトが主張しているという点である。「メタヒストリー」という表題の所以でもある。

6 「メタ」ヒストリーの意味と批判

繰り返すが、ホワイトは歴史的想像力を規定する「メタ」の場を、詩学＝喩法に置いた。「メタレベル」を、ここではそれ自身を観察するレベル、社会学的理論でいう二次観察のレベルと捉えておく。このレベルの象徴として、ホワイトはドイツ観念論ないしロマン派の文脈に基づく形で、反省的な自己意識を強調している。ロマン派の自己反省意識といえ、まず思いつくのがロマン派のイロニー（アイロニー）であろうが、まさにこの反語をホワイトは歴史意識ないし歴史記述がメタレベルへと移行する契機と捉えているわけだ。それに対して、他の3つの喩法（これらを彼は喩法の全体概念としてのメタファーという言葉で括っている）は、前述したように「素朴な」喩法と見做され、機能はいわゆるオブジェクトレベルでの観察行為に限定されている。

しかし、反語が反省的自己意識化によるメタレベルの移行を伴うというのは異論がないとしても、いわゆる広い意味でのメタファー（＝隠喩）にそのメカニズムを認められないのは疑問が残る。というのも、ある表現がメタファー（＝隠喩）として現象するためには、その表現が本来的な意味（本義）から逸脱した意味（転義）において使われているという、表現対象の二重性（意味の二重化）が、それが観察される場において何らかの形で意識化されていなければならないからである。すなわちメタファーがメタファーであると理解される場には、この二重性が必然的に存在する。仮に、この二重性が観察されず、「字義通り」と目される用法のみが意識されているのであれば、それは定義上メタファーとは見做されない。メタファーは、それを受け取られる場（＝メタファーの二重性が解釈され理解される場）で初めて現象する。つまり、観察のレベルを二重化し、一次観察レベル（本義を意識するレベル）に対する二次観察レベル（転義を意識するレベル）が必然的に生じている。従って、この隠喩のレベルをホワイトが説明するように「素朴な」レベルとし、機能を対象の形象化のみに限定するのは妥当性を欠くのではないかと考えられる。

メタファーも、反語同様、観察レベルを二重化し、反省的＝自己言及的な形式を原理的に持つ。ただし、その形式自身がさらに意識化されるのが、つまり反省性自身の反省が現れるのが反語であるとするのが、より精確な説明になるのではないか。このような事情に言及するのには、理由がある。というのも、ホワイトが、メタファーを「素朴な」喩法として、自己言及性を形式的に想定していないことが、彼自身の歴史哲学の解釈ないし記述に、ある困難さをもたらしていると考えられるからである。

先に説明したように、ホワイトの主張はこうだ。4つの喩法の段階的移行によって歴史記述は規定され、それに対応する循環プロセスの型が存在する。そのプロセスを大きく進化させる段階、つまりそのレベルを変化させる段階

は、反語によるメタ化の機能がもたらす。それ以外の喩法と明確な線が引かれる。ゆえに、その段階、すなわち反語への移行段階には、例えば自己否定的な要素も含む、様々なラディカルな二重性が見られるわけである。前述のように、ホワイトはそれを反語のみに認められる、他とは区別される特性とみている。

しかし、ホワイトの具体的な事例の説明では、このメタレベルへの移行を、反語のみならず、他の3つの喩法（包括的概念としての隠喩全体）に認めざるを得ない記述がみられるのだ。このことは、例えば、ニーチェの歴史記述を分析するときに見られるやや強引な説明にも現れている。ニーチェは、かの『道徳以外の意味における真理と虚偽』（Friedrich Nietzsche, Ueber Wahrheit und Lüge im aussermoralischen Sinn. In: Kritische Studien Ausgabe 1. München 1988.）において、言語のみならず物理的現象の記号化を含めたすべての形象化を隠喩（メタファー）と捉えた。この「隠喩」となって可視化された形象は、ニーチェによれば、歴史とともに更なる隠喩化が進められ、二次、三次の隠喩へと変容する。こうなると、言語や芸術等の表現活動は全て隠喩となるが、これはニーチェの二次観察的な、反省的な世界観の核心と考えることもできる。その世界観を、ホワイトは、ニーチェが「隠喩的な芸術概念に自分の歴史的思考を同化させ」ようと試み、その結果、「隠喩を用いつつアイロニー的であろうとするという」（MH109）意図を、すなわちホワイトの理論においては本来的に矛盾する二つの志向性を持ったことによると解釈し、ニーチェにおける隠喩と反語の関係の特殊性を強調する。しかし、先に見た原理から考えれば、この二重性は決して特殊なことではない。メタファーと反語の両者に共通する機能、両者に必然的に含まれるメタレベルへの移行メカニズムを表現しているに過ぎないと考えられるのだ。ホワイトのこのようなやや強引な解釈は、ニーチェのみならず、クローチェに対しての説明にも見ることができる。ホワイトは、それを何とか整合的に説明するために、ニーチェの場合と同様に強引な論理を展開せざるを得なくなっているように見受けられる。

隠喩による「字義どおり」からの逸脱から形象化が始まり、複数の対象を換喩によって関連付け、いわばクラスとメンバー（マクロとミクロ）の論理を用いる提喩がその場に秩序を与え、しかし最後には距離と決定不可能性を伴う自己否定的反省によって反語的な解体を迎える。これらすべてが、非対称的なレベルをつなぐメディアとしての喩法、すなわち二次観察による歴史の（ルーマンならば、世界の、というであろうが）自己記述を可能にしている。それを反語のみに認めるのか、あるいはメタファーすべてに認めるのかという違いはあるにせよ、ホワイトの説明する歴史記述、詩学と歴史の深層に潜む構造的な原理なのだと考えることができるだろう。

もう一点、ホワイトの喩法における歴史的想像力のメタレベル化に関して、留意しておかなくてはならないことがある。それは、歴史記述に対する倫理的なスタンスである。むろん、歴史は客観的な事実に基づくという想定を原則にしている。ただし、それを特定の歴史記述として表現する場合には、不可避的に主観的選択という問題と向かい合うことになる。このような事情は、

例えば、構築主義的な歴史観からみれば、視点の主観的選択性と対象の生産、そして倫理的なスタンスという組み合わせは、常に意識化され、自ら引き受けなければならないものとして主題化されている。

しかし、ホワイトの説明に依拠する形で、その選択制を喩法の問題としてメタレベルへと移行させることによって、歴史記述の主観性は、疑似的にせよ、いったん棚上げされる可能性が生じてくる。視点の選択性という主観性から離れ、記述形式の客観性が前面化し、主題化される。上位概念となったこの形式性のもと、記述内容に関してはすべてを許容する論理となりかねない。この点に関しては、翻訳者による解説にもあるように、倫理性を問うことが回避される歴史的記述となる危険性が指摘されている。喩法を介することで距離を獲得した歴史記述は、形式的客観性の標榜のもとどのような視点も許容されてしまうのではないか、という批判である。このような批判に対し、ホワイトは『メタヒストリー』の後で公刊された『実用的な過去』（邦訳は2017年、上村忠男監訳、岩波書店）等で応答しようと試みているが、いまだ整合的な回答にはなっていないようである。付言しておけば、この構造は、同じように社会の記述方法を二次観察レベルの自己言及形式へと切り替える、ルーマンの社会システム論にも見ることができる。事実、同様の観点からルーマンの理論へ向けられた批判も少なくない。この問題は、歴史学や社会学に限らず、科学的記述一般が孕む対象観察のレベル（と喩法）の問題として、より大きな枠組みで再考される必要があるのだろう。

〈本研究はJSPS科研費（15K02448）の助成を受けている。〉

（平成30年4月16日受理、平成30年6月1日採択）